

1. 河川（湖沼を含む）の水質

(1) 水質調査地点

調査地点は1097地点

一級河川の直轄管理区間約10kmに1ヶ所の割合で実施

- 一級河川（109水系）の直轄管理区間延長約10,500km（平成15年4月現在）に対して水質調査地点は1,097地点設けており、平均的には河川延長約10kmに1ヶ所の割合で水質調査を実施している

(2) 水質調査結果

平成15年は環境基準を満足している地点の割合は、88%で過去最高の値

- 生活環境の保全に関する環境基準項目のうち、有機汚濁の代表的な指標であるBOD（生物化学的酸素要求量）及びCOD（化学的酸素要求量）をみると、平成15年に環境基準を満足している地点の割合は88%になった。
- 水質はここ30年くらいで環境基準を満足している地点の割合が66%から88%と20%以上改善された。

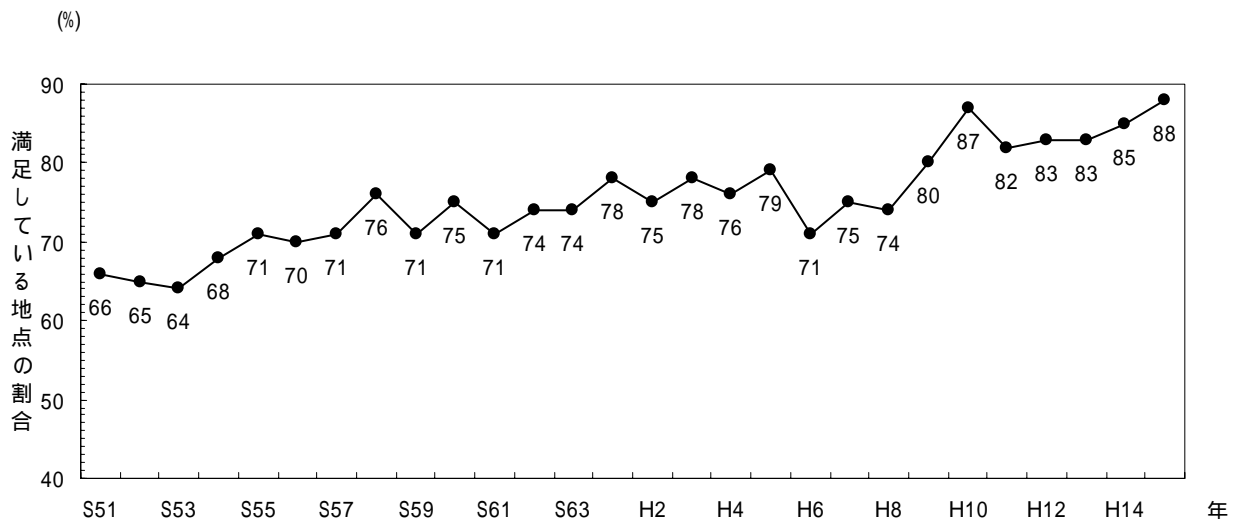


図 - 1 環境基準を満足している地点の割合の経年変化

河川の平均水質は、全体の97.5%が3mg/以下（サケ及びアユの生息に適している）の良好な水質

- 平成15年の河川のBOD平均値は、主要な河川の97.5%でサケ及びアユの生息に適する水質（3mg/以下）となりました。平成5年と比較すると1.0mg/以下の非常にきれいな河川の割合が14.9ポイント増加しました。

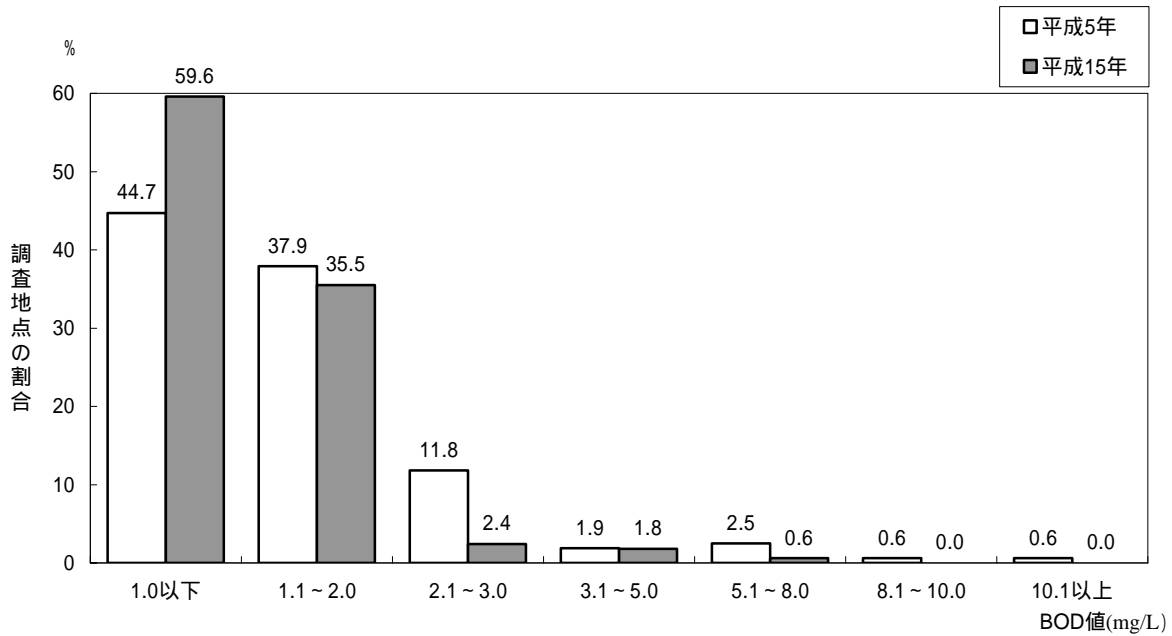


図 - 2 BOD平均値ランク別割合

環境基準を満足している地点の割合は、都市部で低く地方で高い傾向にある。

- 環境基準を満足している地点の割合を地方別に見てみると、中部、北陸の順で大きく、中国、関東、近畿、四国でその割合が小さい。

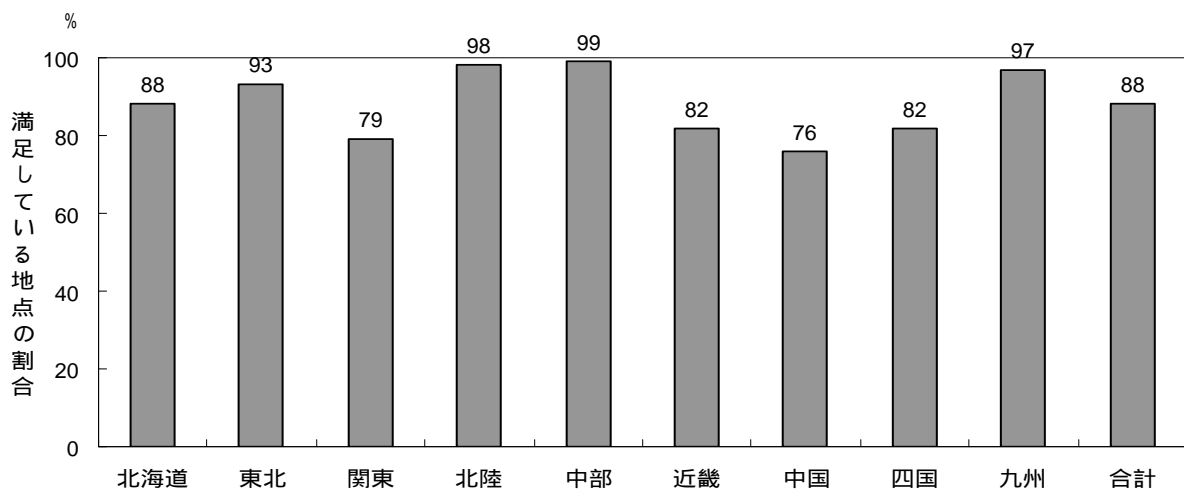


図 3 環境基準を満足している地点の地方別割合

下位5河川の水質は、ここ20年位で大幅に改善

- ・水質下位5河川の平成15年と昭和58年（20年前）のBOD平均値を比較した。例年、下位5河川に含まれている大和川、綾瀬川の水質は、20年前と比較して、大幅に改善されている。下位5河川には、アユでも生息しうる河川の牛淵川が新たにはいっている。

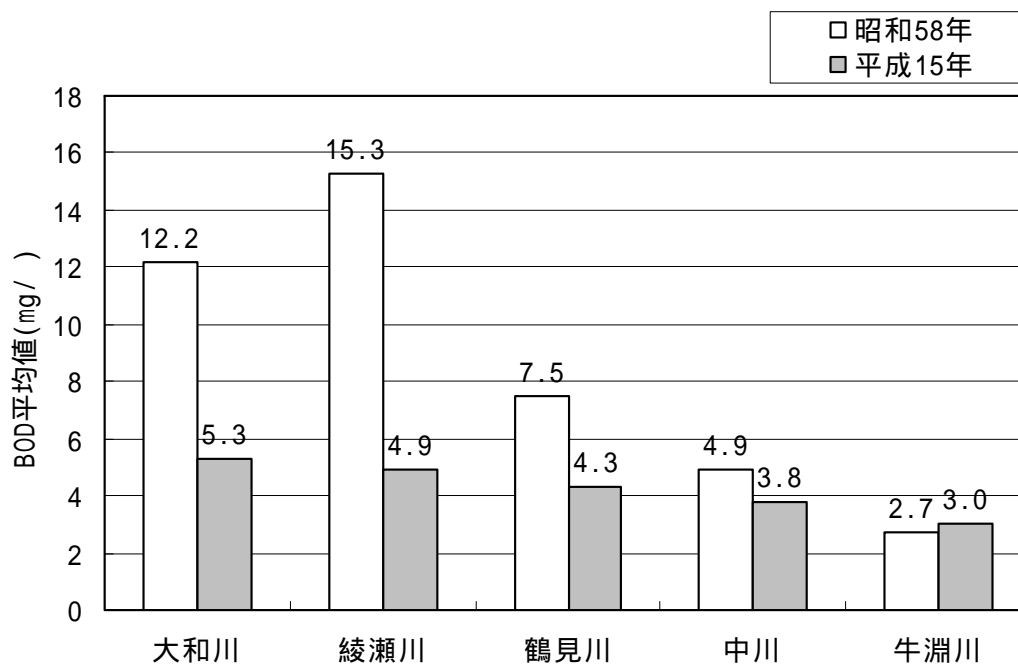


図 - 4 水質下位5河川のBOD年平均値の比較（昭和58年と平成15年）

*平成15年の牛淵川の調査地点は2地点（鹿島橋：3.4mg/、堂山橋：2.6 mg/）であるが、昭和58年の調査地点は1地点（堂山橋：2.7 mg/）のみである。

河川の水質上位5河川と下位5河川

表 - 1 BOD値による河川の水質状況（水質上位5河川）

年	順位	水系名	河川名		都道府県名	地点数	BOD (mg/)	
							平均値	(75%値)
平成15年	1	後志利別川	後志利別川	(シリシバツガリ)	北海道	3	0.5	(0.5)
		荒川	荒川	(アカ)	新潟	4	0.5	(0.5)
		豊川	豊川	(トヨガリ)	愛知	5	0.5	(0.5)
		宮川	宮川	(ミヤガリ)	三重	2	0.5	(0.5)
		大野川	大野川	(オノガリ)	大分	5	0.5	(0.5)
平成14年	1	尻別川	尻別川	(シリツガリ)	北海道	2	0.5	(0.5)
		後志利別川	後志利別川	(シリシバツガリ)	北海道	3	0.5	(0.5)
		十勝川	札内川	(ツツガリ)	北海道	2	0.5	(0.5)
		宮川	宮川	(ミヤガリ)	三重	2	0.5	(0.5)
	5	大野川	大野川	(オノガリ)	大分	5	0.5	(0.6)

BOD平均値が同じ場合は、75%値により評価した。なお、平成11年から、報告下限値を0.5mg/ として集計している。

表 - 2 BOD値による河川の水質状況（水質下位5河川）

年	順位	水系名	河川名		都道府県名	地点数	BOD (mg/)	
							平均値	(75%値)
平成15年	1	大和川	大和川	(ヤマトガリ)	奈良・大阪	8	5.3	(6.0)
	2	利根川	綾瀬川	(アヤセガリ)	埼玉・東京	3	4.9	(5.6)
	3	鶴見川	鶴見川	(ツルミガリ)	神奈川	4	4.3	(5.2)
	4	利根川	中川	(ナカガリ)	埼玉・東京	5	3.8	(4.1)
	5	菊川	牛淵川	(ウシヅチガリ)	静岡	2	3.0	(3.0)
平成14年	1	鶴見川	鶴見川	(ツルミガリ)	神奈川	4	5.5	(6.8)
	2	大和川	大和川	(ヤマトガリ)	奈良・大阪	8	5.5	(6.7)
	3	利根川	綾瀬川	(アヤセガリ)	埼玉・東京	3	5.4	(6.0)
	4	淀川	猪名川	(イナガリ)	大阪・兵庫	3	4.1	(5.0)
	5	利根川	中川	(ナカガリ)	埼玉・東京	5	3.9	(4.7)

川で水遊びができる目安となる水浴場判定基準（糞便性大腸菌群数）によると、8割近くが『可』以上

糞便性大腸菌群数は、人や動物の排泄物由来の大腸菌群により水の汚染を知る指標である。平成15年は全国1049地点において集計を行った。なお、糞便性大腸菌群数については、現在、水浴場における判定基準¹は設定されているが、その他の公共用水域については未設定となっている。

各調査地点の糞便性大腸菌群数のランク別割合は、図-8のとおりである。水浴場における判定基準から見ると、適である100個/100m以下のランクの割合は35.9%であり、可である101～1,000個/100mは43.4%、不適である1,000個以上は20.7%という結果であった。

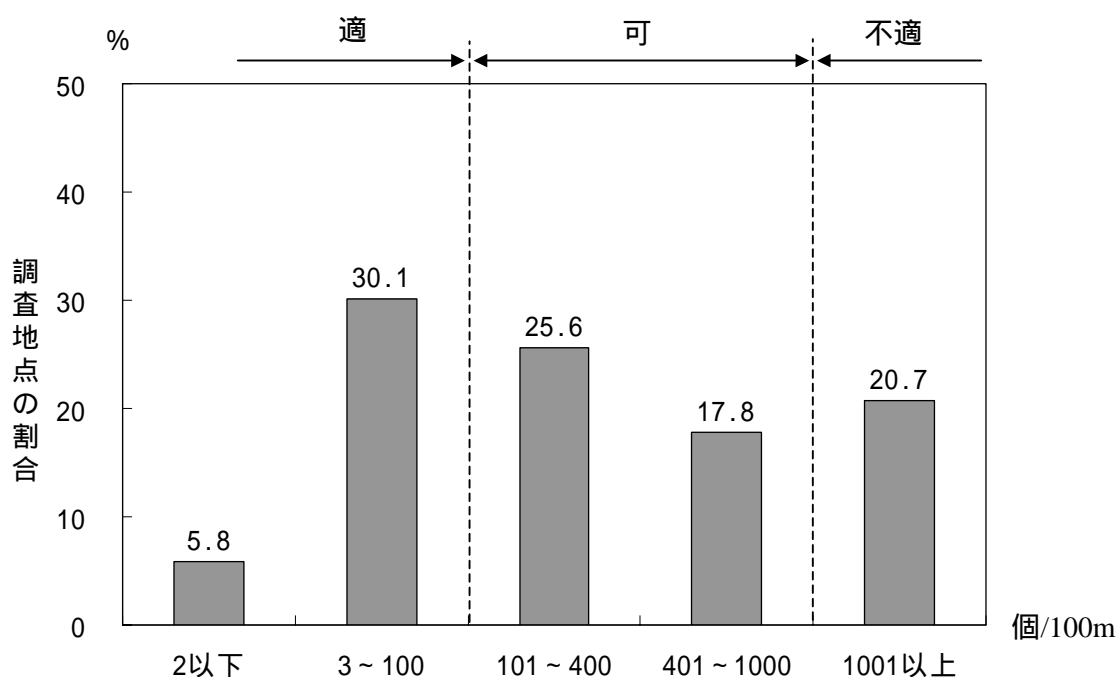


図-5 糞便性大腸菌群数のランク別割合（平成15年）
データは各地点の平均値による。

1 水浴場判定基準（環境省）…糞便性大腸菌群数について以下のとおり区分され、水質A A及び水質Aであるものを「適」、水質B及び水質Cを「可」とする。

水質A A：不検出（検出限界2個/100m）

水質A：100個/100m以下

水質B：400個/100m以下

水質C：1,000個/100m以下

不適：1,000個/100mを超える

2 . コイヘルペスの発生について

- 平成15年5月、我が国において初めてコイヘルペスウイルス（KHV）の発生が確認された。図 - 10 にコイヘルペス発病状況を示す。コイヘルペスが発生した都府県のうち、霞ヶ浦からコイが出荷されているのは全体の60%以上であった。
- 図 - 11に霞ヶ浦、琵琶湖及び主要な河川の水質を示す。コイヘルペスが発生した河川の水質は昨年と大きな変化は無く、良い所でも悪い所でも発生している。

コイヘルペス発病状況

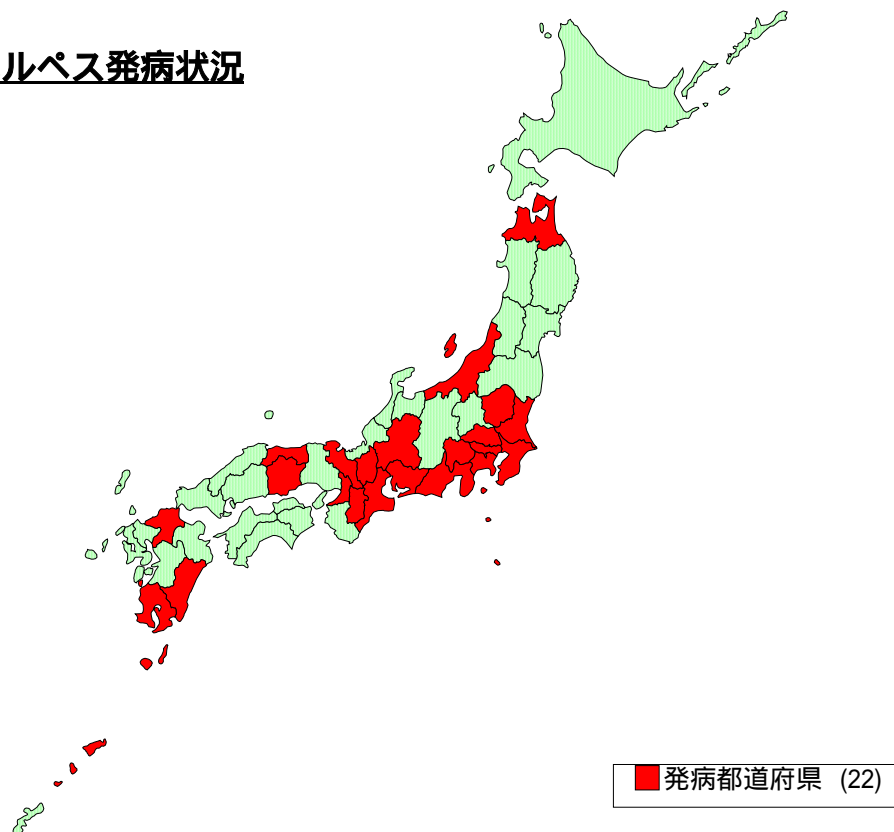


図 - 6 コイヘルペスの発生状況（平成15年度）

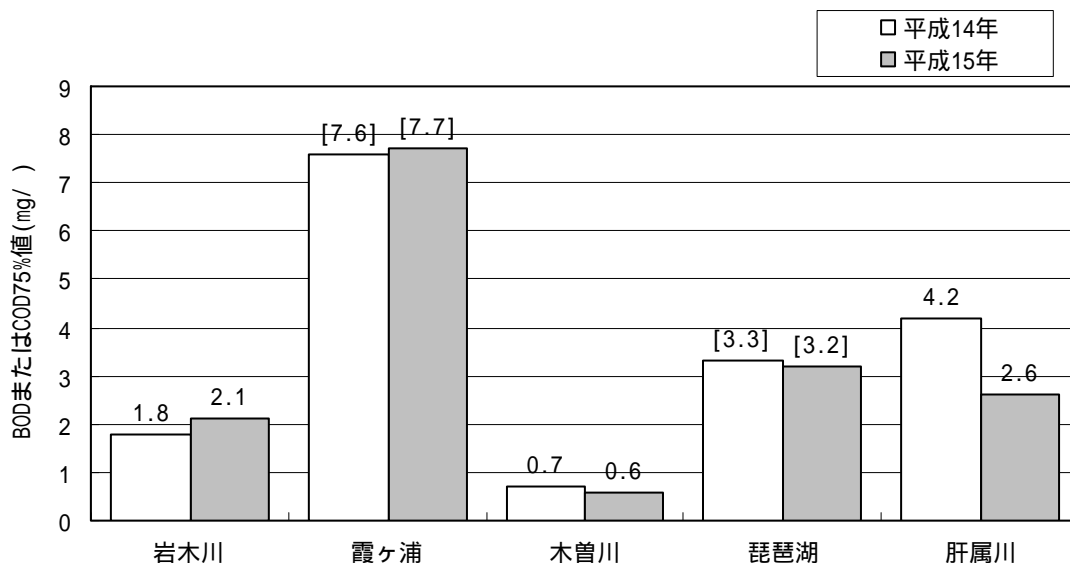


図 - 7 コイヘルペス検出河川の水質（代表地点の水質、BOD75%値）
[]内の数値はCOD75%値